

《書評》

Carol Gilligan *KYRA*

Random House, New York, 2008.

金 暁 輝

『KYRA』は2008年にランダムハウス¹⁾より出版された恋愛小説である。著者のキャロル・ギリガンは、1982年に『もうひとつの声』の大ヒットによって、学術の世界でその名前を知られることになったアメリカの心理学者である。『KYRA』は彼女が発表した初の小説である。2008年1月に、『KYRA』の初版が、5万部発行されたが、その後、2009年6月に、“New York Times”、“Newsday”などの新聞や雑誌の評論、ランダムハウスによりギリガンのインタビュー、読者ガイドなどを加えた、『KYRA』の新版が同社により出版された。

キャロル・ギリガンは、1970年代から心理学を研究し、1982年の著作『もうひとつの声』で男女の道徳発達の相違を主張し、「ケアの倫理」を提起した。これは、あらゆる領域で、様々な議論を喚起し、大きな影響をもたらした。現在、『もうひとつの声』は、18カ国語に訳され、総販売数75万冊を超えている。ギリガン本人も、ハーヴァード大学で初のジェンダーセンターを作り、ジェンダー研究や心理学研究の分野で著しい業績を残してきた。また、1992年、「教育学のノーベル賞」といわれるグロマイヤー賞(Grawemeyer Award in Education)を受賞し、1996年、ニュース週刊誌『タイム』の特集「アメリカを動かす二五人の有力者」に選ばれるなど、学術の世界で高い評価を獲得するに至っている。彼女は、ハーヴァード大学で35年間教壇に立ち、74歳になった現在でもニューヨーク大学で教鞭をとっている。

このような高いキャリアを持つ学者が、なぜ一転して、小説、しかも恋愛小説を書いたのか、彼女にその小説を書くインスピレーションを与えたのは何なのか、そして彼女はこの小説で、何を伝えたいのか。多くの読者は、このような質問を抱えながら、『KYRA』を手取ることになる。『KYRA』の新版の刊行前に行われた、ランダムハウスの読者会(Reader's Circle)によるギリガンのインタビュー

で、ギリガンは、その答えを明らかにしている。ギリガンに『KYRA』を書くインスピレーションを与えたのは、『アエネイス』²⁾であった。ある日曜日に、ギリガンは、“New York Times”に掲載された『アエネイス』の新訳の書評を読んだ。そこに引用された、アエネイスの言葉は、ギリガンを魅惑した。父親探しに世界を飛び回っているアエネイスは、ティードーに対して、「私は、自分の去り行くことが、あなたをそのようにひどく傷つけるとは信じられなかった」と発言する。ギリガンは、このアエネイスの言葉にひきつけられたという。聡明で、敏感な男であるにもかかわらず、アエネイスは、自分の行為が自分の愛する人にどんな影響をもたらすのかに対してどれほど鈍感なのか、また、女は、自分の現実の経験(ティードーの愛の経験)が問題となったときに、いかに狂気じみた行為を取るのか、というような問いを導く思索に、ギリガンは誘われたという。その過程で、KyraとAndreas、二人の登場人物の構想が浮かび、現代版の『アエネイス』—『KYRA』が誕生したとされるのである³⁾。では、『KYRA』、この現代版の『アエネイス』は、どんなストーリーなのか、どんな結末を持つものなのであろうか。

1 『KYRA』のストーリー

Part 1

1980年代半ば、キプロス出身の建築家、Kyraは、アメリカのケンブリッジにあるハーヴァードデザインスクール(Harvard's Graduate School of Design)で教鞭をとっている。同時に、Kyraは、建物の構造(structure)と外見を変えることによって、人々の生活の「構造」まで変えよう、そして家の内部と外部の関係を変えようと望んで、マサチューセッツ海岸にある小さな島—Nashawenaで、伝統的な都市概念に挑戦する、新しい都市の建設と共同体

作りのプロジェクトを始めようとしている。Nashawenaで、Kyraは、精神科医である姉のAnnaと一緒に家を建てた。こうして、Kyraは、ケンブリッジの住まいとNashawenaの家の間で、充実した生活を送っている。

10年前、故郷のキプロスで、Kyraの夫Simonは、戦争という政治的な原因で、Kyraの異父兄に殺された。その後、キプロス内戦が勃発し、Kyraは故郷を去った。この10年間、Kyraは、Simonが「依然として、そばにいて、心も精神も一緒にいる」ような夢の中で生きていた。そして、オペラ監督Andreasの出現はKyraを目覚めさせた。初めて逢った時、「喪失の反対は何ですか?」と尋ね、Andreasは「発見」と答えた。そして、二人のすべては、そこから始まった。

ハンガリー出身で一人息子を持ちAndreasも、戦争で、演劇のパートナーであった妻を失っていたのである。戦争に傷つけられた二人は、同じ運命を感じて、互いの心は共鳴した。そして、仕事のパートナーになり、恋人になってゆく。しかし、Andreasが、自分の会社を作るために、故郷のブダペストに戻り、Kyraのもとを去ったとき、Kyraは自分のこの愛の経験に疑いを抱き始めた。何が真実なのか。Kyraはひどく混乱した。そして、その答えを知るために、彼女は、自らの手首に、深い傷を刻んだ。

Part 2

それから、Kyraは、精神分析医Gretaのところへ、サイコセラピーを受け始める。しかし、Kyraにとって、Gretaとの関係もまた、ひとつの試練であった。Kyraは、学校とプロジェクト、ケンブリッジとNashawenaの間の生活を続けながら、週一回のカウンセリングを受けていた。一年間の治療期間はKyraの真実探しの旅であった。KyraはGretaの目から、一種の理解と共鳴を読み取り、同時に、そこに二人の間に医者と患者との関係を越えた友情を感じたのである。しかし、決められた時間、決められた形式の対話をする、そのような伝統的な治療構造のなかで、Kyraは再び人間関係の真実が分からなくなった。そして、治療が終りに近づくにつれて、Kyraは、Andreasが去っていたときと同じように、再び「別離」を経験した。

その後、Kyraは、Nashawenaのプロジェクトの発表会のために、Andreasはオペラのために、二人はウィーンで、再会した。そして、二人の愛や感覚は

元に戻った。「Kyra、あなたの顔には、私の見たことがない明快さ (clarity) が浮かんでいる」とAndreasは語った。

Part 3

そして、小説の第一人称はKyraからAndreasに変わる。ブダペストにあるAndreasの会社は、伝統に反するまったく新しいオペラの企画をしている。Andreasは、愛、仕事、家族の間で彷徨を続けている。

最後に、KyraとGretaとの間の手紙で、『KYRA』は幕を下ろすことになる。KyraとGretaは、伝統的な治療構造に従う形式的な対話ではなく、お互いに手紙を送って、自分の夢を解析し、語り合うという約束をしていた。そのKyraの文章は、誠実で、明快で、強いものであった。以上が、本書の大まかな筋書きである。

2 『もうひとつの声』から『KYRA』まで

『KYRA』は、ギリガンの初めてのフィクション著作である。学術の世界でキャリアを積み上げてきた彼女にとって、フィクション作品とノンフィクション作品とは、どう関連しているのか。これは、多くの読者の関心の的であった。ギリガンは、心理学者の抽象的な方式によって、人々の愛を考えたくない、また学術研究の方式で、愛について書くことは大変ハードであると述べていた⁴⁾。また彼女は、「たとえ両者に関連があるとしても、『KYRA』が自分の研究に影響されているとは思わない。この関連の意味は、同一人物が書いたものなのである。」と述べた⁵⁾。こうして、ギリガンは、自分の研究と『KYRA』の関連を意図的に避けようとした。

しかし、彼女が自分も言ったように、「同一人物が書いたもの」、また、『KYRA』の登場人物の誕生は2006年、ギリガンが『アエネイス』の書評を読んだときだったのだが、実際に本書を書き始めたのが、十数年以上前だった⁶⁾ので、『KYRA』は、ギリガンの心理学研究との関連が深いとみることも出来るのである。実際にも、『KYRA』の中から、ギリガンの心理学研究に由来するメッセージをたくさん見出すことができる。そして、『KYRA』は、フィクションの形式をとった、ギリガンの学術研究の総括的書物であると言っても過言ではない。

また、ギリガンが述べたように、フィクションは、

調査を基礎にするという学術的な制限がないため、より自由に書くことができる。そのため、『KYRA』の中のギリガンの学術研究のメッセージはより濃厚になり、また、今までの研究の中で書けなかった新しいメッセージが、本書の中に編みこまれた。

ギリガンは、1970年代から、女性心理学の研究をし始めた。1982年の『もうひとつの声』は彼女の最初の著書であった。それから、2008年の初めての小説『KYRA』までの26年間に、彼女は、数多くの著書や論文を発表し、ジェンダーや、心理学研究に大きく貢献してきた。その代表作は、1992年の『岐路で出会う一女性心理学と少女の発達』*Meeting at the Crossroads: Women's Psychology and Girls' Development*、1995年の『声と沈黙の間に一女性と少女、人種と人間関係』*Between Voice and Silence: Women and Girls, Race and Relationship*、そして、2002年の『快楽の誕生一愛の新しい地図』*The Birth of Pleasure: A New Map of Love*などが挙げられる。

『KYRA』は十数年前から書かれ始めたもので、その執筆過程と、彼女の心理学研究の進行を重ね合わせてみると、本書と、『もうひとつの声』以来の研究との深い関連性が想像できるのである。『KYRA』の中から、ギリガンが学術研究でも発信し続けてきたメッセージを、以下の三つを挙げることができるだろう。

(1) 関係 (relationship) の重要性

まず、『KYRA』の一つ目の重要な主題は、関係性である。『KYRA』の中に、主人公Kyraを中心とした、あらゆる関係について描かれている。夫のSimonとの関係、姉のAnnaとの関係、友達との関係、恋人のAndreasとの関係、家族の年長者(母親、叔母、祖母など)との関係、そして、Gretaとの関係などである。

関係は、治療の入れ物ではなく、関係自身が治療法なのである。少なくとも、そうなることが理想である。治療専門家と一緒に、人は、自分を治療の場に陥らせた関係性の問題を、再体験する。(p.27)

夫のSimonが亡くなったときと、恋人のAndreasが去ったときのKyraの感情表現は異なったものであった。Simonとの生死の別離は、Kyraの自分の愛の経験に対する確信を動揺させなかった。むしろ、

自分の愛の真実をもっと強く感じていた。Simonとの誓いを信じ、「彼が依然としてそばにいる」ように、そこでの関係性は変わりがないのである。しかし、Andreasが去って行く行為は、Kyraを混乱させることになった。自分の愛の経験と関係の現実との間に、齟齬が生じたのである。関係の中における「真実」とは何なのか。Kyraはその答えを探し始めることになる。そして、Gretaとのサイコセラピーの中で、Kyraは再びこの関係の問題を体験した。そこでは、関係そのものが、治療法なのであった。KyraはGretaのところで再び別離を体験し、その後、Kyraは、自分の叔母を訪ねる。そこで、母親のことを聞いたり、子どものころのことを思い出したりして、家族の年長者との関係を再体験した。また、同じ建築家である同僚やパートナー、友達との関係にも救われた。これらの関係の中で、Kyraは真実を探り、自分の関係の問題を解決できるようになっていった。このように、ギリガンは、フィクションの手法で、自分の経験を理解するために、人間関係がいかに重要なのかを、生き生きと表現している。関係は、人の経験を豊かにし、人を強くしてくれるのである。

しかし、もし、この治療の中の関係そのものは問題があるのなら、この治療は問題を複雑化にするだけになる。(p.27)

伝統的な治療構造では、決められた時間の中で、医者と患者が対話する。医者が、時には、話のヒントを提示する。時には、傾聴だけを行う。患者の夢を分析し、患者が持っている心理問題を再現させる。そして、時間を単位として、費用を取る。このような構造の中では、治療の関係そのものが問題になりやすいのである。

では、次の『KYRA』の二つ目の主題である構造の問題をみてみよう。

(2) 伝統的な構造 (structure) への挑戦

Kyraの新しい都市作りのプロジェクトは、『KYRA』を貫く糸である。KyraのNashawenaでの仕事は、ストーリーの全体を貫く場面設定の一つである。また、ギリガンの学術研究と関連する重要な部分でもある。

「よき柵がよき隣人を作る」と言う、『もうひとつの声』で、ギリガンが引用したこの言葉は、『KYRA』の中で、再び引用された。Nashawenaでのプロジェクトは、まさに「よき柵」作りの仕事だった。

Kyraの建築の構想では、「光」がポイントであった。彼女は、壁の代わりに窓、そしてオープンな天井を通す「光」で、家の内部と外部とつながり、建物の構造からはじめ、人々の伝統的な生活習慣を変えていくことを目指した。さらに、Kyraは、隣人の間の境界を流動的にし、ネットのようなコミュニティを作ることによって、現代都市社会と違った生活構造をもつ新しい共同体ができあがることを望んだ。Kyraは、それによって、人間の内部と外部、精神と物質、私的と公的との間に、新しいつながりが作られることを信じていた。

ギリガンは、『もうひとつの声』では、人間関係の重要性と、伝統的な構造を問い直す必要性を理論的に説明する一方で、『KYRA』では、Kyraのプロジェクトを通じて、私たちに、アカデミー研究より実践的な「伝統的な構造に挑戦する」メッセージを発信したとみることができるだろう。しかし、さらにこの挑戦のメッセージは、建築だけに留まらなかった。例えば、「もし、医学の人体図が女性であるなら、服を着せるべきである。もし、どうしても裸でなければいけないのなら、代わりに男性の絵を使うべきだ」。「男性は自分の愛する女性を人間としてみるのではなく、偶像化するのだ」、などといった記述を見出すことができる。『KYRA』の中では、こうした、女性に関する伝統的な認識に異議を申す記述は数多い。伝統的な構造のなかでは、男性は女性を正しく認識できないことを指摘し、男性と女性との関係の重要性、社会構造を問い直す必要性が『KYRA』の中で強調されているが、それはギリガンの学術研究のメッセージでもあった。

そして、Andreasの伝統的形式のオペラへの挑戦、Gretaの伝統的な心理治療の構造への挑戦など、ギリガンは、もっと広い範囲で、自分のこの「挑戦」というメッセージに実践的な意義を与えたのである。すなわち、「人間の内部の生活構造を変えるために、人間の外部の生活構造も変えなければならない(p.38)」。換言すれば、伝統的な構造を変えるために、人々が新しい人間関係をつくり、自分の内部の生活スタイルを変えることが必要であるということだ。そして、この内部の生活スタイルを変えるために、住まいの構造、生活の環境、つまり外部の生活スタイルを変えることが必要であるとされる。こうして、『KYRA』で採用されたフィクションという記述方式で、ギリガンは、今までの研究で理論的、抽象的に伝えられて

きた社会構造に挑戦するメッセージを、もっと実践的に、直観的に伝えることに成功したと言えるだろう。

(3) 愛の力

「愛の力」は、『KYRA』の底流にある三つ目のメッセージである。ギリガンは、『快樂の誕生—愛の新しい地図』の中で、私たちに、「愛」の新しい「地図」を提示している。なぜ、愛は、いつも喪失という悲劇や裏切りといったストーリーの中で語られるのか。ギリガンは自分の調査に基づいて、私たちに、その愛を解放する方向性を示そうと試みたのである。男性と女性との間の沈黙、社会と自分自身の内部との間の分裂は、私たちの愛の中に、つねに付き纏うのである。愛の悲劇を快樂へと導くには、私たちが「オープン」であることが必要なのである。ギリガンによれば、「オープン」であることは、私たちの情緒を豊かにしてくれるのである。

『KYRA』の末尾、Gretaへの手紙において、KyraはAndreasとの対話の内容を伝えている。

Andreas：なぜ、あなたは私とブダペストに戻らないのか？……私たちが一緒にいるために、どちらかが犠牲をしなければならぬ。

Kyra：それは犠牲に対する理解の問題である。私たちは、忠誠のために自分の生活を犠牲にしようとしていた。それは、安全のため、つまり、再び喪失を経験するリスクを避けるためでもあった。……私たちは、もっと「オープン」に、物事を考えなければならない。(p.232)

このように、Andreasの愛に対する思考は、まだ失うことを恐れて、犠牲を求める伝統的な愛の構造に留まっている。人が愛の中で、犠牲を選択したのは、新たな探索を恐れているためである。Kyraが言った「オープン」であることとは、関係のオープンではなく、心のオープンなのであり、この「オープン」であることは、探索の勇気を私たちに与える。

喪失の反対は何なのか？—発見。

「オープン」は、私たちに、「発見」のための探索の道を開いてくれる。そして、「喪失」の歴史の負担を捨て、快樂の道へと歩み入ってゆくのである。

キャサリン・スティンプソンCatharine R. Stimpsonは、『KYRA』は「私たちが傷つける歴史の力と、私たちの傷を癒し、私たちを救う愛の力に関わる、魅力的な小説」だと評価した。更に言うと、「愛の力」

は、私たちの傷を癒し、私たちを救う力だけではなく、「オープン」の「愛の力」は、伝統的な愛の構造に挑戦し、新しい愛の形式を発見できる力にもなるという。

3 最後に

以上のように『KYRA』を読んできた我々には、主人公Kyraが、ギリガンの学術研究の代弁者のように見えてくるのだが、Kyraを通じて、フィクションの形で伝えようとしたギリガンのこの三つのメッセージは、心を打つものであると言えるだろう。我々読者が受けるそのような感銘は、建築学、演劇、文学、歴史などの広い分野にわたる深い学識に支えられた、本書の豊かな知的源泉によってもたらされるものと思われるのである。

確かに、本書の中でのKyraの新しい都市作りは、一種のユートピア的なものに見える。しかし、「光」、「壁」、「窓」、「ネット」、「透明」、「通気」など、これらの建築学の単語は、まさに、心理学にも共通する語彙なのである。ギリガンは、Kyraの新しい都市作りに、自分の新しい心理学作りの「理想」を託したのではないかと解釈することも、あながち「深読み」に過ぎるとは思われない。

注

- 1) ラングムハウスは、英語一般書籍の分野で世界最大の出版社だと言われている。
- 2) 『アエネイス』：古代ローマ詩人ヴェルギリウスの叙事

詩。ラテン文学の最高傑作とされている。

- 3) [Gilligan2009] p.245参照。
- 4) [Frey2008] 参照。
- 5) [Gilligan2009] p.246参照。
- 6) [Frey2008]参照。そのとき、ギリガンは、まだ小説を書くつもりでいたわけではなかったし、具体的に何を書くのかをすら決めていなかったという。

文献

- Frey, H., 2008. "A different voice from Carol Gilligan", *Los Angeles Times*, Feb 3, 2008.
- Gilligan, C., 1982. *In a different voice: Psychological theory and women's development*, Harvard University Press. [キャロル・ギリガン『もうひとつの声——男女道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』岩男寿美子監訳、川島書店、1986年]
- 1993. *In a different voice: Psychological theory and women's development*, second edition, Harvard University Press.
- 2002. *The Birth of Pleasure: A New Map Of Love*. New York, NY: Alfred A. Knopf.
- 2008. *KYRA*, Random House.
- 2009. *KYRA*, second edition, Random House.
- Gilligan, C., Brown, L. M., 1992. *Meeting at the Crossroads: Women's Psychology and Girls' Development*, Harvard University Press.
- Tomas, T., 2008. "DESIGNING WOMAN", *New York Times Book Review*, Feb 3, 2008.